

論文

## 明日の福祉国家と環境問題

—近代日本と水俣の教訓—

内藤 辰美  
佐久間 美穂

### Welfare State of To-morrow and Environmental Issues

—A Note on MINAMATA—

Tatsumi Naito  
Miho Sakuma

明日の福祉国家はその持続可能性に関係して、複数の課題を抱えている。環境問題もその一つである。環境問題はグローバルイゼーションの下でますます深刻となり、福祉国家に大胆な構造変革を要請する。環境問題の克服なしに明日の福祉国家は持続することが難しい。

われわれは環境問題の克服という困難な課題に対し、歴史に学ぶよう主張する。そして、あらためて水俣病に注目する。水俣病には、明日の福祉国家に向けた教訓がある。本論は水俣病の教訓を通じ、明日の福祉国家について若干の考察を試みようとするものである。

キーワード 近代日本・水俣病・周縁的民衆・経済成長と社会成長・権力とコミュニティ・生命感覚の喪失

#### 問題の所在

われわれは、20世紀に福祉国家を發明し、生活の安定化に向けて前進した。それは人間の歴史における偉大な成果であった。しかし、その福祉国家=現代国家は、依然として、不均等な発展を志向する国家であった。経済成長と社会成長の調和を欠いた国家であった。そして、その結果、負の遺産も産み出した。資源の枯渇を招きかねない乱開発と環境破壊はその代表例であった。個別、さまざまな事情を抱えたそれぞれの国家が利害対立を露にしている現在、20世紀が作りあげた構図を容易に変えられるとは思わない。しかし、21世

紀の福祉国家=明日の福祉国家は、その発展的存続のために、この難しい問題を避けて通れない。20世紀型福祉国家からの脱却は切実な課題である。

近代を、そして20世紀を主導した社会体制は自然を収奪し環境を攪乱した。国家はそれを後押しし、国家と企業は一体となって経済成長を迫及した。ハイルブローナーは、経済成長=資本主義的拡張に潜む危機を次のように説明した。「基本的には、工業成長あるいは資本主義的拡張は一つの<指数的>な発展プロセスであり、雪だるまのころがるプロセスのように、単に一定速度の拡張

を維持するだけでも、絶えず増大する資源量を要求し、絶えず増大する廃棄物を吐き出すプロセスである。「指数的成長をするいかなるプロセスも無限に維持することはできない。遅かれ早かれ、このようなプロセスはすべてその環境に過大な負荷を与え、その栄養物をすべて使い尽くし、成長に伴う廃棄物によってそれを汚染してしまうのである」(Heilbroner: 123)。こうした意識は、われわれの関心を資源・環境問題に導き社会体制と国家のあり方に再考を促すようになる。20世紀後半、資源・環境問題への関心が多数の人々をひきつけたのはハイルブローナーがもったような危機意識であった。われわれの国家を含め、21世紀の福祉国家は、20世紀の福祉国家が外側においてきた「環境」の問題を、内側の問題＝福祉国家の維持発展に重大な影響を持つ問題として認識しつつある。21世紀の福祉国家は「環境」という問題を外してその維持と発展を展望することができない。そうであれば、21世紀の福祉国家を機能させるためには、20世紀の福祉国家が外側においてきた＝十分な対応を怠った「環境」問題についての考察は緊急の課題である。地球規模の環境問題にどこから接近するのか。われわれは、環境問題について多くの成果があることを知りつつ、あえて、語りつくされてきたようにも思われる水俣と水俣病から接近する。われわれにとって水俣と水俣病は、いまなお、考察を求めたいテーマであり、どうしても確認しておかなければならない「問題」と「テーマ」である。

ここで、あらかじめ、水俣と水俣病についてふれておくことにしよう。水俣は近代日本、現代日本を象徴的に表わす地域である。そして近代日本、現代日本における環境問題を如実に示す地域である。当然のことであるが水俣病は水俣に先行してあったわけではない。幕藩体制から近代そして現代に至る歴史のなかに水俣病は発生したのである

が「水俣は水俣病より大きい」(谷川健一、2006: 18)のである。もう少し丁寧に言えば、「水俣には残酷なものがいきなり最初からあったわけではなく、小さな町の朝焼けと夕焼けがあって、海と山があって、穏やかな雰囲気があった。そうした小さな平和が一転したところが水俣病にはある」(同上: 20)のである。水俣病は窒素という企業によって引き起こされた公害であるが、水俣は窒素に先立つ歴史を持ち、水俣には窒素とかわることなく生きてきた人々がいたのである。これが水俣病を考える原点である。

確かに、水俣病には企業犯罪の一面がある。ただ、そこには、それを単純な企業犯罪と断じて閉じることのできない問題—事態の深刻さ—、風土の問題がある。もちろん、この主張は、水俣病が窒素の引き起こした公害であるという「事実」から目を逸らす意図を含んでいない。主張の主旨は、窒素の企業犯罪という捉え方だけではこの問題の複雑性に迫れないというものである。水俣病を窒素という企業の問題に限定してしまうことで、水俣病の全容あるいは根底にあるものを見逃してしまう危険性があると主張したいのである。水俣病の全容は水俣と水俣周辺地域の歴史を紐解くことでより深く解明されるであろう。水俣病は近代日本、そして現代日本を映している。水俣病は20世紀日本の福祉国家を映している。水俣病には近代日本のは跛行性を払拭できない現代日本の病理性が潜在する。それはわれわれの社会体制に潜在する病理であり、国家が抱える病理である。われわれが、この「潜在するもの」への関心を失うとき、言葉を換えて、現代日本がかかえる病理性への関心を失う時、われわれの社会理解と社会認識は浅く偏倚したものとなる。そして、問題克服＝21世紀日本の福祉国家建設への実りある接近を放棄することになる。水俣病は終わっていない。以上に言う意味で終わっていない。確かに或る時期の厳

しい事態＝出口の見えない深刻な事態を念頭におけばこの問題をめぐる運動は新しい段階に来ていると言えるであろう。しかし、事態がそこに推移してきたということをもって終息したとみなすことはできない。現に、被害者救済にかかわる問題は未解決である。それだけではない。われわれには、いま、水俣病の教訓を歴史に活かすという課題がある。しかしその課題は消化されないままにある。現代の市場システム、すなわち、「たんに、財を交換する手段にとどまらず、社会全体を養い維持していくためのメカニズム」(R, L, Heilbroner : 40) は、国家を超えて進行する。そしてそれに連動して環境問題も国家を超えて生起する。いまや環境問題は一国を超えて世界的視野に立った考察が必要である。対応を急ぐあまり検討を要する課題、確認を要する課題を見失うことは許されない。われわれの水俣と水俣病への言及はそうした自戒に発している。

## 1. 近代日本における跛行性と民衆

近代日本(戦前)と現代日本(戦後)における連続と断絶というテーマは長い間関心の的であった。そして、それは、戦後日本社会の変容として、近代日本の構造と戦後日本の構造における相違として語られてきた。その場合、現代日本は、暗黙裡に、戦後日本を含意した。確かに戦後日本は、とりわけそれを限りなく現在に近づけてみた場合、近代日本といくつもの点で<ちがいがい>を示している。しかし、現代日本が近代日本と全面的に断絶していないことは、しばしば指摘されてきた天皇制の問題だけでなく、統治者・官僚の「お上意識」の残存に、言葉を換えて、彼らの中に宿る中央支配の番人意識に、具体的に指摘できるのである。<sup>註1-1</sup>

なるほど、流動化を超えて液状化とさえ言えそうな近年における日本社会の変化、いわゆる情報

革命とグローバリゼーションを中心にした日本社会の構造変動は、これまでの日本社会の在り方を大きく変えるものであって、一見したところ近代日本はその影をますます薄めているように思われる。しかし、依然、国家と企業が民衆の生活に優先する事態は不変である。われわれが水俣病に関心を寄せるのは、それが悲惨な結果をもたらしたということだけではない。われわれの関心は、国家と企業の前に虐げられた民衆が存在した近代日本の姿(一例としての足尾銅山をめぐる悲劇)を、現代日本(水俣)も持ち続けているということにある。言葉を換えて言えば、水俣病は現代日本が近代日本を超克していない証しである。水俣病は、かつて、<名もなき大衆>と大塚久雄が呼んだ人々、近代日本において社会の周縁にあった人々の存在を、いまなお、われわれに確認させるのである。

周知のように、明治国家は近代日本が目指す社会体制を確立するために国民を隈なく統合する支配機構であった。そのための支配装置＝明治政府は、旧体制における身分制の撤廃を變則的＝部分的な形で行い、近代社会と近代国家に不可欠な自由を、<制限付き>で認め、国民を体制維持に協力させるという巧妙な制度を設計した。「原則的には、天皇以外であれば、如何なる有力者の地位にも、誰でもがのほりうるというルールである。一方で上からの支配機構でありながら、他方では同じ機構が下の英才をすいあげ、かれらがカウンター・エリット<機構反対エネルギーの指導者>に走るのを前もって防止する社会的エントツの役割をはたすところに、無名の下づみから身をおこし、革命の嵐をくくり、今日の栄位にのぼった伊藤たち元老の体験から学ばれた異常なかしこさがよく出ている」(久野収・鶴見俊輔：130-131)。国民を新体制の形成・維持に動員する巧妙な制度設計が伊藤たち元老によって図られた。周縁に位

置づけたれたく名もなき民衆>は体制の形成・維持に動員されながら体制の中心部からは確実に距離を置いていた。明治国家はかれらを<周縁者>として管理した。「<周縁化>の概念を<システム外>に置かれた人々というように考えてはならない。逆に彼らは特定の権力構造に統合された人々、ただしその最下層に統合され、最も苛酷な支配と搾取に苦しむ人々である」(R.Stavenhagen, : 49)。権力基盤に絶対的安定を欠いた明治政府にとって国民の国家に対する反逆はもっとも恐れるところであった。当然、明治国家に対する反逆に政府は厳しい対応で臨んでいく。民衆の管理は体制の隅々に浸透した。家族・学校・企業・地域を通じて国民は徹底的に管理されることになった。

民衆の抑圧された感情を和らげたのは、漸次、上から与えられた自由と、前近代的な身分に置かれた民衆(アイヌ・部落民)と囚人、そして不本意にも日本に住むことを強制された朝鮮人の存在であった。かれらの存在は、国民に、かれらよりもましな存在としての自らを意識させ、国家秩序と国民の階層意識を合理化する役割を果たすことになった。近代日本は、巧みな差別政策=周縁化・底辺化政策の上に構成されていた。新しい国家に絶対的服従を求める一方、周縁と底辺に置かれた絶望的民衆の存在を意図的に肯定し、差別の構造を周知させることによって、体制基盤の安定化を図っていたのである。

以上のような明治国家と明治政府の戦略は、近代日本が二つの事業の遂行を課題としたという事情と関係する。一つは新しい国家造り=近代的軍事国家づくりであり、もう一つはその国家造りの基礎をなす近代産業の育成である。新しい国家は対内的・対外的に、急ぎ、政治的・経済的基盤を固める必要に迫られていた。在来産業を別にして、近代産業については資本の本源的蓄積が不十分であったから、新しい産業の育成を核とした産業の

編制と資本主義の確立・発展を促す経済システムの確立は、いきおい、国家の主導するところとなった。そして、産業の再編と国家造りは列強に対する軍事的対抗と重なったから、明治国家が主導する日本資本主義は、「軍事機構=キイ産業を旋回機軸とし、半封建的な地主制を基底として」(山田盛太郎, 1934)展開されることになった。日本には前近代的要素を抱えて近代化の歩みを始めなければならない事情があった。そしてその影響は、後に、いたるところに顔を出してくる。

## 2. 近代日本と水俣

ここで、水俣と水俣病に関心を向けてみよう。「肥薩辺境のやまあいに位置した水俣は、交通不便で孤立的歩みを続けてきた。西北に開けるリアス式海岸の入り江を利用しての漁業と、わずかな海上交通が行われていた」(水俣市史: 486)という状態である。「したがって労働といっても農・漁業が主で、その不足労働力は天草地方から補っており、桜野上場の開拓が天草から移住した人々によって行われたのをはじめ、山間部には他地区からの入植者が多い。また、漁業面では丸島・湯堂・袋海岸にかけて天草方面から移住した人々が多いといわれ、天草―水俣間の労働力の交流は相当古くから続けられてきた」(同上: 486)。もう少し水俣について見る。不知火海(八代海)と山に囲まれた水俣は、中央を流れる水俣川の河口の平地部分が狭く、海が山に迫った格好になる。そのような地形のため、交通機関は船を利用する海上を使用することが一般的であった。その海上である不知火海は、面積が約1400km<sup>2</sup>、琵琶湖とほぼ同程度で、カワクチイワシ、サバ、イカ、ボラ、アジなど「魚わく海」と呼ばれるほど、天然の漁礁がある豊かな漁場であった。その中でも水俣湾は岬と沖合の島に囲まれ二重の内湾で、その内外には干潟や磯などの漁礁があり、海岸沿いにはた

くさんの種類の魚介類が集まり、産卵場であったため、不知火海の中でも屈指の好漁場であった(水俣病に関する社会科学研究会：14)。こうしたことから、水俣には小さな漁村が点在した。その漁村の中には、対岸の天草地域などから来て漁をする人々も多く、その一部が水俣に定着して漁民集落を形成していったものもあった(同上：6、14)。水俣地域は海の恩恵を受けている土地であったが、その反面、田畑は狭小で、明治以前耕作地は肥後全領の半数程度しかなかった。村における人口構成も、一軒当たり2.5人で、肥後の平均であった1.56人よりも多い数値を示している。明治31年(1898年)当時は、総戸数2,542戸で、主な産業は農業と漁業、製塩業であった(同上：14)。

明治維新の時期には、西南戦争の激戦地となったために農業は振るわず、また、農家にとっての唯一の現金収入であった製塩業も、明治43年(1910年)の塩専売法が施行されたため廃止されることになった。貨幣が生活に入り始めたこの時期に、そうした状況は村人の日々の生活を厳しくさせていた。さらに博打などの流行もあり、多くの村人たちが金貸しに頼らざるを得なくなっていた。ただでさえ狭い農地しか持たなかった村人たちがその農地を金貸しに取り上げられることになった。一方で、金貸しは地主化して土地の所有を強化していくことになる。その結果、明治維新前は、隷属農民とその家族の割合が34.9%であった水俣村が、明治になると、村民の9割以上が小作人となり、地主による土地所有が定着した(岡本達明・松崎次夫(1)：32)。

水俣では「古くから製茶、製塩、木材、竹材、製炭などが行われてきたが、これらはほとんど農家の副業的なものであり」(水俣市史：486)、「明治41年(1908年)日本窒素肥料(株)の前身であった日本カーバイト商会が設立されるまでは、

農・漁業(兼製塩)を主とした一寒村にすぎなかった」(同上、486)。「明治41年8月になって、野口遵により木曾電気株式会社と日本カーバイト商会が合併し、日本窒素肥料株式会社(現チッソ(株))が創設され、引き続き同社の水俣工場が発足、初めて水俣に工場労働者が生まれた」。そして、「工場の相次ぐ拡張は、そのまま村民生活に大きな影響を与えた」(同上：486～487)。「その後、熊本、鹿児島両県下にわたって発電所を建設、大正10年にはカザレー式アンモニア合成法の特許権を買収して、世界で初めての工業化に成功、合成アンモニアおよび硫酸の製造工場を建設して、業界のトップとなった」(同上：511)。「昭和になると、日本の大陸および南方進出に伴って、事業の主体を北朝鮮に移し、鴨緑江上流の三河川に90万キロワットの大発電所を建設し、これを基礎にして一大化学工場群を創設した。さらに昭和13年には、鴨緑江本流にダムをつくり70万キロワットの水豊発電所を建設。また華北大原付近の黄河にもダムをつくり、その勢いはとどまるどころを知らず、南方まで伸びて台湾、海南島、シンガポール、ジャワ、スマトラ等の外地に進出、日本窒素関連会社の数は50会社に上り、それらの会社の従業員数は当時8万人ともいわれていた」(同上：512)。

電気事業・化学工業の発達は資本主義の成長と密に関係する。そして、日本資本主義がその基盤を確立し、産業の高度化を実現するためには基盤となる動力革命が必要であった。水力から蒸気へそして蒸気から電力へという移行・転換が不可欠であった。「近代的生産における原動力は、二つの画期的変化を示している。第1次変革は、水車より蒸気機関への原動力革命であり、第2次変革は蒸気機関より電動機への原動力革命である。これを近代的生産の発展段階に照らしてみると、水車は分業制手工業時代の支配的原動力であり、蒸

気機関は産業資本制時代の支配的原動機であり、電動機は独占資本制時代の支配的原動機である」(小山弘健・上林貞次郎・北原道貫：175)。「近代産業確立の生産基軸たる機械器具工業・金属工業・石炭産業は、独占確立過程においてもその運動基軸をなす。これらの生産基軸における集中・独占の成立発展は、独占段階への移行・発展における転回基軸をなし、一般的独占過程における指導的役割を演ずる。しかし、独占確立過程においては、これと共にこの三生産基軸としてかつそれと結合して、独占過程を特徴づける新生産基軸が成立・発展するに至る。即ち電気業・化学工業・石油業である」(同上：190～191)。「電気の世紀は同時に化学の世紀といわれる。化学工業の発展はその労働手段においてみれば、・・・またそれは、工業への化学の応用(化学的法則の応用は物理的法則の応用に対応する)の発達を表し、生産物についていえば新たな化学的生産物の増大を意味している。この化学的工業の本格的発達には独占段階確立期のことに属し、それは電気業・電化の発達に照応する。そのことは就中化学工業の精鋭たる電気化学についてもっとも明らかである。即ち電気分解(電解)または電気炉の高温(電熱)を用いる電気化学工業は、電気業の発達に照応する」(同上：192)。

窒素の事業展開は、日本資本主義が独占段階に達したことを意味している。木曾電気と窒素は、明らかに、近代日本における産業の編制過程＝高度化過程に現れ、日本資本主義＝帝国主義の南進に合わせて成長した。木曾電気の社長野口遵は電力を大量に使用する工業であったカーバイド工場を、曾木電気株式会社から約30キロ(約7里)にあった水俣に建設した(岡本達明・松崎次夫(2)：28)。窒素が水俣に立地したのには理由がある。ひとつは水俣の地形的な要素である。カーバイド工場は原料の石灰岩を必要としたが、工場

で使用する原料の石灰石の運搬には使用できる港が必要であった。水俣はその条件を備えていた。良質の無煙炭を多数に有していた天草が対岸にあり、原料や製品の輸送に適していた。加えて山林には電力開発に不可欠な水が豊富にあった。それに地元の誘致運動も加わった(水俣病に関する社会科学研究会：15)。

窒素について敷衍しよう。この工場では爆発も多く起こり、工場に於ける労働は危険で苛酷なものであった。その上、低賃金であった。安い賃金であったため辞める人も多かったが、貧しい暮らしを余儀なくされた村人にとっては、現金を得ることのできた工場での賃金労働は大事であった。しかし、この賃金労働(村人の賃労働化)は村のもっていた共同のあり方に変化をもたらした。江戸時代から続く五人組は徐々にその機能を弱体化させていたが、家族・兄弟の血縁関係は維持されていた。工場の進出による現金収入が土地を相続する長子だけでなく、長子以外の子どもが家族を持つことを可能にした(岡本達明・松崎次夫(3)：38)。

大正時代に入ると日本は第一次世界大戦を経験する。戦争の影響で輸出入に影響が出た。戦争は窒素にも影響を与えた。国内の硫安価格が高騰したため、窒素は発電所や工場を拡張、石灰窒素の工場を新たに建設することになり、多くの労働者が必要となった。多くの労働者を必要とした窒素は、水俣だけでなく、近隣の島や対岸の天草諸島にも労働力を求めている(岡本達明・松崎次夫(2)：134、192)。そして、その一部は、第一次世界大戦後、朝鮮侵略にあわせて建設された韓国北部の興南(朝鮮チッソ興南工場)に渡っている。もっとも、そうしたなかにあっても労働者の賃金は低く、長時間労働を強いられた。そして、人体をむしばむような危険な作業も多くあった。窒素は、この時期、米騒動等体制の不安定要因に対応

し、水俣工場の賃金改善を実施した。会社は村人にとって、生きる糧を獲得する上で欠くことのできない場所となった。そして、やがて、工場に依存する地域経済という構造が創り出されていく。

ここで、天草や周辺の島々の状態についてもみておくことにしよう。天草や周辺の島々の家は掘っ立て小屋で、畳などはなく（同上：238）、農業といっても畑でカライモがとれる程度の極貧の地域であったから、働き場所があり、賃金が払われる会社は魅力であった。「私が生まれましたのは、熊本県の不知火海の中の小さな島である天草、天草の乱のありました天草です。両親とも天草です。天草というところは離島の典型的の姿をしておりまして、近ごろ“辺境”という言葉が流行りますが、一種の辺境です。そこで生まれた人間たちは、人口が多くその島で自給自足できないものですから、長男というか家を継ぐ後とりを残して全部、島を出ていかなければならないという運命があるわけです。で、そういうところで生まれましたから、当然私の母も父も天草を出る運命を担っていて、私が生まれて三ヶ月ぐらい経ちましてから水俣に移ってまいりました」（石牟礼道子：15）。石牟礼さんの話をもう少し聴こう。「天草から水俣はよく見える。海を越えた向こうの岸のことを“向こうべた”といてちるんですが、＜向こうべたの水俣の辺に会社ができるげな＞という噂が海を伝わってくる。・・・＜水俣に会社ができれば、水俣はきっと都になるかもしれん＞と、遠いところへ海を渡って行くよりも、我が家が見える向こうべたの水俣に渡って、どんな仕事があるかわからないけれども仕事にあり付けば、ありつかなくとも、一ぺん村を出たらかえれないから、せめて自分の島が見えるところで暮らしていたいもんだということで、ぞくぞくと、天草から水俣へ渡ってくるんです。いま水俣病の患者さんの家庭というのは、大方、天草からそんな風流れてきたわ

けです。・・・そういうひとたちは工場の職工なんか全然なれなくても、だんだんチツソ工場がおおきくなるにつれて、自分の願望みたいなものが幻想となって美しくなっていくといえますか、そういうものを眺めるようにチツソ工場を眺め、そして、海の上で釣りをしながら故郷の人たちに会う時などは、まるで自分の自慢をするように、水俣は景気がいいとか、会社はいま何を作りよるとか、そういうことを嬉々として話してきたわけです」（同上、17～18）。それまで天草の炭鉱で働いていた人が水俣に移る。会社と日給取りは天草の人にとって魅力であった（岡本・松崎（2）：189）。

漁民も水俣に移住した。「そういう人たち—主として漁師さんになるわけですが—は、水俣という地域社会が形成されていく過程で一番村の中核を形成している地つきの人たちじゃなくて、村の周囲で、水俣村の一番周囲のところで、海にずり落ちないように、村から町に、町から市になっていくその一番外側のところで暮らしている人たち、その人たちは、もともとから土地に住んでいた土着の人たちからは＜あれは天草のもんだ＞とか、いづらか軽蔑を込めた形でいわれ、それでもなおかつ水俣の共同体の中では心情的に思えば切ないほど一番水俣を愛していた、水俣市が発展していくにつれ何のおこぼれもえられなかった、恩恵に浴していなかった、そういう人たちが一番水俣を大切にしてきた、と私は思うんです」（石牟礼：18）。天草ながれ・天草なぐれとも呼ばれた天草の漁民たち。そうした天草の漁民に対して、水俣の農民は、「縞（島）の布」「縞の紋（者）」と蔑称した。こういった水俣側の天草の漁民に対する偏見と差別的対応には歴史的経緯があった。「不知火海は、熊本県の西海岸と天草島との間の海である。不知火海の沿岸では、今日でも古風に、漁民のことを「舟人」（ふなと）といい、漁民の

住む部落を「舟津」(ふなつ)という。・・・舟津は路地一つ、あるいは川一つ隔てて、百姓部落と接続している。たとえば天草下島東海岸のほぼ中央にある、宮野河内という古い舟津を訪ねてみると、山のせった海沿いに家々が並び、溝のような小さい川を境に、左側が百姓部落、右側が舟津であり、ほんの少し行けばまた軒を接して百姓部落となるのである。しかし、そのわずか数尺の川または路地一つで、言葉が違う。顔つきまで違うという人もいる」(岡本達明編1978年：21～22)。「水俣の人に聞くとこういう。(水俣)の舟津で所は一口に言えば、水俣の人種、全然離れた違う人種ち、見方をして良か如(ご)たるな。近親結婚で血はよう濁ってしもうととじゃなかるうかと思ふな。天草でも舟津という地名のある所は、顔ば見てみなっせ、みんな違うばい、その付近の人たちの顔立と。水俣に来て水俣の舟津に行ってみれば顔立ちが違うもん、今ん子供たちはそげん事はなかばってん。言葉聞いても全然水俣弁とは別でしょうが。あそこは水俣弁じゃなつかですけんな。本当に水俣と一線引いてしまったような形の部落じゃモンな。一つの法律じゃろか、一つの掟て、いうんじゃろか、そういうやつがあったじゃなかるうかと思う、昔。一天草の漁民の原点は、天草の乱後の幕府の漁政にある。一万二千余名の天草島民が原城に殺され、村々に人影なく島の大半が亡土と化した後、徳川幕府は天草を天領とした」(同上：22)。「この前近代はどのように近代に引き継がれたか。一言でいえば、農民、魚民間の通婚の途絶であり、漁民の被差別民化である」(同上：23)。どうしてこのような漁民の被差別民化が生まれたのか。岡本は、「不知火海の場合、漁民に対する意識を形成した要因は、農、漁の本質の差、疾病、貧困の三つである」(同上：24)と指摘する。<sup>註21</sup>

水俣病の発症者に天草からの移住漁民が多いと

いうことは、水俣病の直接原因がチッソ水俣工場の流し続けた廃液にあったことを見れば偶然である。ことさら移住漁民や天草を意識する必要はない。しかし、発症者が天草からの移住者を含む漁民に多いということは、日常の生活を海に依存する漁民が深刻な被害者であったということであって、偶然とばかりは言い切れない。谷川の指摘する、農、漁の本質的な差がそこにある。仮に、漁民、わけても天草から移住した漁民に対するある種蔑視の風土が水俣病の原因究明を遅らせ、その後の対応に影響を与えたとなれば、そしてそれが、水俣病の原因究明を遅滞させ、水俣病を拡大させたとすれば、言葉を換えて、水俣病の解決を妨げた一因となったとすれば、単なる偶然以上のものがある。水俣病には二つの問題が混在する。その一つは、飯嶋の指摘する企業への忠誠心である。「水俣病は、チッソと昭和電工のアセトアルデヒド製造工場の排水に起因している。わが国にアセトアルデヒド製造工場は、7社8工場あった。二社以外の工場では、アセトアルデヒドをどのように製造していたのか、水俣病の原因になった有機水銀は排水にながされなかったのか。・・・なぜ、チッソと昭和電工で水俣病が起きたのか。各社の工場の立地条件が異なることが要因の一つであろう。しかし、似た立地条件もあり、その差異は、単なる地形の違いではなく、食習慣も眼に入れて決めなければならない。・・・水俣病を誘引、拡大したのは、会社的な心性によるのではないか。会社的心性の一つに、会社への帰属意識がある。会社の利益のために、公害の発生源を積極的に隠すこともあるが、消極的に知られないようにするか、知ろうとしない気持ちがある。企業機密として、会社存亡の危機として、公害の情報を社内に閉じ込め、外部から窺いがい知れないようにする。あまつさえ公害被害者に敵対さえする。この心性が、水俣病の対策を後手後手にし、

被害を拡大したといえよう」(飯嶋孝：2)。そしてもう一つが谷川の言う「白熱した憎悪」である。「水俣病患者にたいしてチッソ労働者が、患者のなかに労働者自身がふくまれていたにもかかわらず、ひややかな態度をとりつづけた理由は何か。この問いにこたえる常識は、企業への忠誠心とか、保身とか、低収入ある者からの差別とかいった、どこの企業城下町にもみられる傾向であろう。水俣にもそれが皆無とは言わないが、その底に流れているのはもっと白熱した憎悪である。冷淡と言っても、憎悪が言葉のかたちをとらないための冷たさである。水俣を多くの知識人や芸術家がおとずれたが、この謎を解きえた者はいない。石牟礼道子の諸著作も、その功績はみとめるが、いわば患者側からの一方通行であるために、憎悪の相互性を形象化するまでにはいたっていない」(谷川雁：1)。<sup>註2.2</sup> いずれも近代日本が清算できなかった問題であり、水俣病の根が深いことを示唆する問題である。

### 3. 水俣・水俣病における<3つ>の教訓

われわれが、ここで水俣と水俣病をとりあげたのは何故か。それは、われわれが、水俣と水俣病には福祉国家の将来を展望するとき重要な示唆があると考えたからである。いま環境問題は地球規模に拡大し、一国を超えた対応が要請されている。環境問題の深刻さ(拡がりと深まり)と緊急性(深刻な事態に対する取り組みの緊急性)は福祉国家の発展可能性にまで関係する。そしてその深刻さを意識するとき、しばしば、さまざまな提案が出されてくる。もちろんそれは歓迎されてよいことであるが、事態が深刻であり、緊急である場合には歴史に学ぶ姿勢もあってよい。福祉国家の発展的未来に向けて、水俣と水俣病には学ぶところが少なくない。以下、水俣病の教訓を、相互に関係する3つの問題としてについて記述すること

にしよう。

#### (1) 経済成長と社会成長

水俣における水俣病の発生は、<一つの見方>をすれば、経済の成長が社会の調和ある発展を実現しなかったことを教えている。経済の成長は、社会の存続と人が生きるために必要であった資源を浪費し、環境を破壊した。ローマクラブの『成長の限界』はそうしたあり方に対する警告として多くの人々の関心をひきつけた。経済の成長と企業の発展は架空の個所で展開されたわけではない。経済成長は周縁化された民衆を抑圧し、分断し、相互に不信をいだかせ、時には恐怖に陥れるという形で実現されたのである。すでにふれたように、それは、資本による資源・環境の収奪であった。産みだされた果実の多くは資本に帰属し、果実を産むためにつくられた負の成果=公害・乱開発に伴う荒廃と生態系の破壊という付けは民衆に回された。経済成長のパイを極大化することを目的とした社会体制と国家はそうした資本の動きを支援した。一種の<成長連合>が形成され、民衆は<成長連合>の前に屈服を強いられた。学問も、間接的ながら、かかわりをもってきた。「価格、需要、供給などを中心の基本概念とする微視的経済理論は、経済的なもの本質を、経済的効用の獲得を達成するための手段・行為の目的合理的選択というアプリアリな仮定にもとづく演繹で把握し、純粋に経済的なモデルを構築しようとする。合理的行為の体系として経済的体系を展開してみせる限り、非経済的範疇とみなされる政治的・法律的・文化的等の諸要因や人間関係的要因の介入は論理的にゆるされない。この排除された諸要因をも包括するより大きな総体が社会的なものであるとしても、経済と社会とが接合される理論的根拠はどこにも見出されない。人間行動の統一的説明を可能ならしめるような共通の基礎理論

を欠いているからである。・・・この論点を、今日の成長社会における経済成長と社会成長の問題にかかわらせて考えてみるとどうなるか。成長社会における経済成長がもたらした社会的帰結こそは今日の重大問題である。経済の成長は社会にとっても成長なのかという問題、いいかえると経済成長と社会成長との関連がどのようなものであるかが問われている。ところが、社会学では社会成長という概念は未熟である。経済学では経済成長論が展開されているのに対応して、社会学では社会成長論が展開されるというようにはなっていない」（早瀬利雄：148～149）。経済成長と社会成長のギャップが埋められない一因に経済学と社会学の問題があるという早瀬の認識は記憶に値する。<sup>註31</sup>

脱あるいはポスト産業社会が論じられて久しい。脱あるいはポストと表現するか、高度と表現するかはともかく、その背景には産業社会の変貌がある。<sup>註32</sup> 確かに産業社会は変化した。経済的指標は比較的明確な基準、外的基準をもつから、もっぱらそれを使って作成される指標を基準とすれば明らかに経済は新しい段階に到達したと言えるであろう。しかし、水俣病は、経済の成長＝成果が、無前提に社会の成長をもたらすわけではないということを教えている。陽である経済成長には陰の部分負の部分が存在する。このことを軽視・無視して経済の成長を追及することの問題を認識するためには「パラダイムの転換」が必要であった。中山茂は、アメリカ環境史学会の動向に注目しながら、＜環境史＞というの新しい動きを、「旧来の歴史叙述の中に一つのコンパートメントを要求して正当な位置づけを獲得することではなく、歴史を異なった新しい視野の下に見直し、書き直そうというもののようである」（中山茂、1982：162）と見て、＜その可能性＞に言及した。そして新しい＜環境史＞をコント（Comte, A.）

のポジティビズムに対する懐疑と批判に求めている。「ポジティビズムのもっとも無難な訳は、＜正の思想＞あるいは＜プラス主義＞である。それはネガティビズム、＜負の思想＞、＜マイナス主義＞の対をなすものである。・・・つまり本来は陰と陽と相まって成り立つものであるところを、コントおよびその一派は決然として陰の思想から決別し、うしろをふりかえることもなく定向進化の陽の方向への前進に踏み切ったのである」（同上：163）。「ポジティビズム科学史の方法は簡単である。既成の知識に何か新しいものをつけ加える科学論文を蒐めて、それを一本の時間の縦軸の上にならべ、いかに人類は無知から解放され、進歩して来たかを示せばそれでよい」（同上：164）というものである。ポジティビズムの呪縛から解放されるために何が必要か。中山は「可逆性」という思考を活用しようと言う。「テクノロジー・アセスメントの重要な原則に、＜可逆性＞というものがある。正のベクトルで進んでいてそれが誤りであることがわかれればすぐ負のベクトルをかけて元に復せる、その修復可能性を初めから開発計画の中にくみこんで技術開発をしなければならない、と。つまり科学技術史に逆槽の構えの史観を導入することである」（同上：169）。コントの社会発展史観＝三段階の法則をマルクスやエンゲルスが批判的にみて、実証的段階を最終段階と考えたコントの学説を、弁証法的にみてそれが過渡的段階にすぎないと主張したのは、コントのポジティビズムに対する批判であり、弁証法的考察は可逆性を射程に入れた思考法とみることもできるであろう。

話を経済の成長と社会の成長に戻そう。経済の成長と社会の成長について言えば、二つの成長の間には、経済の成長が社会の成長を促し、社会の成長が新しい経済の創出に貢献するという関係＝循環がなければならない。ポスト産業社会では経

済の成長が社会の成長＝調和ある発展を導いているかということである。経済成長の果実が少数者の手中に帰し、多数の人々の生活が改善されないという構図が構造的に定着している限り「成長」のあり方が問われるのは当然である。社会指標の開発は二つの成長のギャップを意識したものであり、それは一つの成果であったが、いま、指標の問題は脇におくことにしよう。ここでなされなければならないのは、産業社会の変貌や新しい経済の動向に関連して、あるいは、脱・ポスト、高度産業社会の出現に関連して、新しい社会は、近・現代のもつ問題を克服し、真に、新しい段階に到達したかという問いである。経済成長が社会の成長に結びつかないという近・現代の問題は新しい社会において解消されたのだろうか。われわれは、新しい社会の出現を歓迎する前に、改めて、二つの「成長」に対する関心を惹起し、＜成長＞の意味を問い直す作業を行う必要がある。グローバルイゼーションの進展が著しい今日、世界が一体化している現在＝われわれの社会と国家がその一環にすっぽりと位置している現在、その問いは、われわれの社会と国家を超えて、途上国をも射程におく試みである。

## (2) 企業・国家＝権力と民衆＝コミュニティ

すでにふれたように、公害は、決して水俣病を嚆矢としない。近代日本は足尾銅山をはじめいくつもの公害を歴史に記している。足尾の鉍毒災害を近代日本における公害の象徴であるとみれば、水俣は現代日本における公害の象徴である。足尾と水俣―近代日本と現代日本の代表的公害に共通しているのは、その加害者＝発生源が企業であり、その企業を国家が支援し、そこに発生した被害＝負の効果を民衆に押し付けてきたということである。両者において民衆は被害者であった。そして民衆が生きていく前提＝民衆にとって生活のフレーム

であったコミュニティが壊された。企業と国家は体制の維持・発展という目的を共有し、相互の利益共有を意識して、そこに「連合」を形成した。「連合」にとって民衆・国民の生活やコミュニティの破壊は利潤の追求と国家目標の前にマイナーと認識されていた。利益の獲得犠牲は容認されてよいことであった。<sup>註33</sup>

戦前の足尾鉍毒事件と同じく、戦後の水俣病は明らかに企業による環境破壊行為であり、国家による企業支援の帰結であった。しかし、そのように指摘するだけではこの問題の全容はわからない。企業と国家の犠牲にされたのは周縁にいた民衆である。足尾鉍毒事件や水俣病の深淵に迫ろうとすれば「周縁」におかれた民衆に対する理解が必要である。周縁は、単に、中心からの距離＝空間的位置を意味していない。周縁におかれている民衆とは、社会構造の中心的支配的位置から遠ざけられた人々、社会の仕組みの中で排除と抑圧の受苦を授けられた人々である。足尾の被害者も水俣の被害者も権力から排除された人々、周縁ないし周縁状況におかれた人々であった。大事な事は、周縁あるいは周縁状況におかれた人々は、強大な権力の前に、しばしば分断され孤立するということである。抗議を押しとどめ、事件の真相を隠蔽するために、権力「連合」はしばしば民衆を分断させ孤立させるという手法を採用する。被害者は最末端＝最周縁に置かれた人々だけではない。公害の情報を社内に閉じ込め外部から窺いがい知れないように管理された、従業員もまた被害者の一角にある。分断と孤立化が進められる中で、物言わぬ人々は、自己の意図に反し、加害者となることも少なくない。分断され孤立した人々の間では、相互不信が醸成され異界人の集合と化し、閻化が進められる。丸山真男のいう「たこつぼ型」社会である（丸山真男：1961、宮村治雄：96）。水俣では、工場内の位階序列、塗素社員と農民、農

民・商人と漁民という異界が典型的とも言える形で機能した。権力によるそうした民衆操作は明治国家の指導者たちが充分意識してきたところのものである。環境破壊が病を創り、権力がそれを隠蔽しようとし、民衆＝住民に相互不信を植え付けた。そこに見られるのは、国家権力の「闇」化政策＝情報管理＝言語剥奪政策、すなわち、近代日本に潜在する民衆軽視・蔑視という病理性＝名もない民衆の抑圧である。

以上と関連させてもう少し敷衍すれば、そして〈ある視点〉をもって言えば、壘素という企業を核として＝生産拠点として成立した水俣は、国家＝権力の規定を受けていた。一方、その水俣は、壘素以前から、そこを生活環境とする民衆にとって、壘素・権力とは異なる民衆自身の生活拠点＝コミュニティであって、そこは当初から、生産拠点としての都市＝国家・権力としての都市と、生活拠点としての都市＝民衆のコミュニティという、一体にして、しかし必ずしも利害を同じくしない主体が共棲した環境であった。その結果、壘素は水俣の外部経済を内部化することを通じて水俣を生産の拠点に仕上げた反面、生産に伴う負の成果を放置し、生活の拠点であった民衆のコミュニティを破壊した。企業・国家＝権力の拠点が繁栄し、民衆＝コミュニティが貧困な状態におかれることになった。もしかするとコミュニティにとって異物であったかもしれない〈企業〉が、資本の運動法則の下では主となり、主の〈民衆〉が異物とされた。

およそ地域資源は環境の一部として地域を構成するものであって、本来その恩恵は地域総体が享受すべきものである。決して、地域資源は、特定の主体によって特定の時代に消費尽くされるという性質のものではない。しかし、歴史は、地域資源＝地域環境が特定の活動主体によって、特定の時代に集中して消費されてきたことを示してい

る。水俣について言えば、特定の活動主体＝壘素が、特定の時代に集中して地域資源＝環境を乱用し、その結果、民衆によって長く、複数世代にわたり活用されるはずの地域資源＝環境が著しく損ねられた例であった。民衆にとって豊かな生活環境であった水俣湾、不知火海は壘素と権力によって収奪され、民衆は生活の基盤を脅かされる結果を招来した。そして地域的共同が軋む中、民衆のコミュニティは物理的にも社会的にも貧困な常態＝未来における危機を生み出した。

水俣病の未来に向けた一つの教訓は、コミュニティを、企業・国家＝権力の視点から見るのは一面的理解であるということである。コミュニティは民衆の生活拠点であって、民衆の視点が必要なことを教えている。われわれの未来展望は、そうした「視点」＝「問い」を用意して行われなければならない。「視点」と「問い」は複数であるが、少なくとも、水俣と水俣病を教訓として言えば、企業・国家＝権力と民衆＝コミュニティの関係こそ重要である。企業・国家＝権力と対抗しながら一体にあらざるを得ない民衆の姿、自らの生活基盤であるコミュニティを危機的状況にさらしながらなお企業・国家＝権力と一体的に生きなければならない姿がもつ意味を問うことが必要である。そもそもコミュニティは対立のなかに均衡を得ているのであって、平穩無事を真の姿と見ることはできない。これは水俣を離れて真実である。これまで、地域は、とりわけ近代以降、資本と国家による包摂が顕著であって、その過程は同時に、伝統的な地域文化の解体過程であった。しかし、資本と国家による包摂を経てなお、少なくとも「深さ」を意識して観察した場合、沈殿していた部分＝潜在するものの存在が浮上し機能することも少なくないのであって、水俣について言えば、天草や海人に対する「異人視」はその根を絶やさないのである。水俣の展開する「もやいなおし」は

その意味で歴史的試みである。環境破壊に苦しんだ水俣が、目標を環境の創造に定め、「環境創造みなまた推進事業」を通じて、「もやいなおし」を掲げ「環境創造みなまた」を推進していることは、歴史の実験（コミュニティ再生のモデル都市づくり）として注目されるであろう（環境創造水俣実行委員会編、1995年）。

もちろん、「もやい直し」が容易に進むものではないことはこの問題に長く深くかかわってきた人たちが、そしておそらく水俣市民が認識するところにちがいない。「このくもやい直し」は、市民のなかでは多義的に理解されており、なかには対照的な捉え方も表出されている。〈旧の人間関係を取戻す〉と解釈している市会議員がいる一方で、これまでを考え直してむしろ新たな人間関係を構築していくというのであれば受容できるが、旧の状態に戻すというのであれば困ると受け止めている水俣病患者もいる」（丸山定巳：38）。そうした現実を踏まえて、なお、われわれは、「環境創造みなまた推進事業」を通じた、「もやい直し」に期待する。<sup>註3-4</sup> それはなぜか。「環境創造水俣」は、水俣を舞台とする運動であり政治である。しかし、それは水俣をく通して世界に向けた運動でもあり、政治でもある。それは、世界が、新しい政治を目指す運動のひとつである。今日まですべての政治に通用してきた命題、「つまり経済はエコロジーに優先する」という命題を超えて、「われわれが必要とするのはエコロジーに立脚した政治」であり、「それこそが社会政策でもある」という認識に立った運動であるからである（Gruhl, H. : 13～14）。別な角度から言えば、それは、社会の復権を求める運動である。資本と国家による「自律的能力の破壊と、そこから結果する文化的画一化とが、国家による市民社会の破壊を必然的にしてきた」動きに対抗する運動、「市民社会の国家による置きかえ」に対抗する運動、市

民社会の衰弱に対抗する運動である（Andre Gorz and Michel : 52～53）。

### (3) 「自然観」と「科学の役割」

水俣病は、近代日本そして現代日本に「反省」を迫る契機となった。そしてその反省は、否応なく、われわれの意識を、二つの問題に導いた。一つは、「自然観」の問題である。水俣病は窒素が行った有害物質＝有機水銀を含む廃液の投機による自然破壊、内湾の汚染である。その行為により、これまで「魚涌く」海と言われていた不知火海は、一転、廃液に汚染された死の海となった。もちろん「奇病」を発症させるまでには時間の経過があった。水俣病は、1932(昭和7)年から窒素が生産を始め、戦後、量産したアセトアルデヒドの生産にともない強い毒性を持ったメチル水銀が、工場廃水のなかに混じり海に流され、魚に蓄積されたメチル水銀が魚を食べた人間の健康を害した病気である。「1950年後半のエネルギー変化、つまり石油化学への乗換の時、水俣病が発生した。この業界は史上が狭く、各社の競争が激しかった。しかも石油化学への転換のため、旧装置をスクラップしなければならなかった。このような中でチツソをはじめ各社は、水俣病を理由にアセトアルデヒド製造装置まで止める状況にはなかった」（飯嶋孝：2）という事情がある。当初、水俣病はその原因が解明されず、奇病とされていた。水俣病が奇病として扱われたのは、原因究明を意図的に遅らせ、廃液と病気の因果関係を隠蔽することを意図したからであり、その意味で「奇病」は、なによりも、加害者側の見立てである。

水俣病は企業活動を優先させる国家目標がありそうした国家目標を是とした社会があって生まれたものである。それは都留重人、宮本憲一らの「公害」規定に示される通りであって、すでに、「自然の攪乱」（マルクス・エンゲルス）として指

摘されてきた、資本主義＝近代における支配的な社会システムの本性に発するものである。<sup>註3-5</sup> 確かに、自然破壊は資本主義に固有の問題ではない。社会主義国における公害問題を直視すれば公害と自然破壊は「自然」への無理解と強引な対処によって発生することが明らかである。自然との豊かな共存を重要な「価値」として認識せず、あるいはまた、そうした「価値」を排除する社会は、常に、自然破壊を内包する。

とまれ、水俣病は、自然＝海が無限の回復力を持つものでないことを教えている。外部経済を内部化し、内部不経済を外部に放出し続けてきた企業の行為は、利潤追求を優先させるものであったが、それだけではなく、自然の回復力を無限であるかのように思い続けてきたわれわれの〈自然観〉も水俣病を生んだ一因である。自然観についてはもう一つある。産業革命以降、自然のままの状態は劣位＝下位であって技術を媒介にした自然の改変＝産業化は優位＝上位であるという認識が広まった。そして自然環境の破壊は進歩の側面であるが如き風潮が広まった。産業化が導く都市化も、また、進歩の一面と評価されるようになった。しかし、産業化に導かれた都市化は繁栄の一面これまでにない貧困も露呈した。産業革命後の都市は、いっそう、人工的世界となり、ゾンバルトの都市に与えた定義、「都市的な、ないし都会風の居住とは自然にさからう居住である」(Sombart, W.: 40) という定義に示される特徴を顕著に示してきた。ハワードは20世紀の初め『明日の田園都市』(Howard, E.: 1898年)を書いたが、そこには、新しい産業都市に対する批判がある。自然はすべてを許容しない。自然のままの状態は劣位＝下位であって技術を媒介にした自然の改変＝産業化は優位＝上位であるという自然観も間違いである。水俣病は、見方によれば、産業革命以降の自然観に警告を発している。

水俣病の反省がわれわれを導いたもう一つの問題は、科学、人間の生活＝全体性を直視しない科学の在り方である。科学的発展を生活から切り離し(全体性をもつ生活を個別実証科学的関心に従属させ)、その成果を誇るというやり方が横行する限り、あるいはそうしたやり方をもって社会のあり方を考えるという仕方が横行する限り、すなわち、科学を、本来全体性をもつ「生活」から切り離し、科学は生活を支配し管理する道具なのだ考える仕方が普通のこととして浸透していく限り、水俣病は、形を変えて、いつ・どこにでも起こりうる。科学はそれが高度なものであればあるほど生活との関係を、したがって科学の限界を意識しなければならないものである。私見によれば、「科学を意識しない生活は貧しく、生活を意識しない科学は凶暴である」。近代は科学が飛躍的に発展した時代でありその恩恵の大きさは改めて指摘するまでもない。しかし、科学が人間から離れ、社会から離れ、生活と科学の関係が断ち切られてしまうときとき、悲劇が誕生する。<sup>註3-6</sup> 水俣病の教訓はそこにある。生活理論なき社会理論、あるいは、人間不在の社会理論は、それがいかに壮大で緻密であっても問題を含んでいる。その意味で、われわれは、壮大さから距離を置いている民俗学や人類学の主張にも耳を傾けてみなければならない。「人類学の重要な貢献のひとつ、それは、客観性と〈全体性〉の自覚であるとレヴィストロウスは強調する。社会科学は現実の社会問題を構成するさまざまな要素を突き止め、それらの関係を定式化し、理論に結び付けていくことに重点をおいてきた。そこでの作業の重点は、複雑な現状を〈単位に分けて分析する〉ことであった。しかし、〈現状〉をどのような現象のまとまりとしてみるか、どのような歴史的過程の断面として位置づけるかについては複数の答えがありうる。偏った〈全体像〉から部分が選ばれば、分析はもち

ろんのこと、分析に基づく政策も必然的に間違った方向」(佐藤仁：2650～251)をとることになる。

水俣病は、一つには、湾を汚染し、魚を死に至らせ、人間の身体を蝕む病気、肉体の病であり、二つには、社会を蝕む病気、対立と偏見を助長する社会の病である。肉体の病に関して言えば、その原因の解明に期待されるのは医学や化学であろう。(西村肇・岡本達明、2001)、後者に関しては、主として、人文・社会諸科学の課題であろう。しかし、それは、第一義的にという意味であって、科学の間に境界線を敷くことではない。科学(それぞれの科学)は、限界をもつ存在であって、絶対性や独断的信奉＝独断的な優位性の信仰に埋没しない自覚が、言葉を代えて節度を持った態度が必要である。そして、そうした認識に立ってみれば、レビストロスやハイデッカーの主張が実証科学の否定でないことは明らかであろう。<sup>註37</sup>

#### 4. 明日の福祉国家と環境問題

##### — 結語に代えて —

福祉国家(「さしあたり社会保障制度を不可欠の一環として定着させた現代国家」(東京大学社会科学研究所編、1985～95年)にとって、重大な課題の一つは、環境の問題である。環境の問題は、大気・海洋・森林・河川・地下水まで「自然」総体をカバーする問題である。それは社会のシステムでは生産のシステムから消費のシステムにわたる、そして産業構造・社会構造・生活構造を貫通する問題である。20世紀の福祉国家は、そうした問題を意識しつつも、それが福祉国家の発展的存続にとって重大な問題であるとまでは意識しなかった。しかし、21世紀の福祉国家は環境の問題を避けて通れない。

われわれはこの小論で、検証の対象に水俣と水俣病を取り上げた。われわれが明日の福祉国家と

いうテーマに水俣と水俣病を登場させたのは、もちろん、環境問題が明日の福祉国家の抱える唯一の問題であると主張するためでもなければ、水俣病が唯一の環境問題であると主張するためでもない。明日の福祉国家が抱える問題は環境問題を含めて多岐にわたっており、また、環境問題だけを取り上げてみてもさまざまである。そうしたことを承知して敢て水俣病を登場させたのは、20世紀における福祉国家の貢献と限界に言及したかったからであり、水俣と水俣病がそれを如実に示しているからである。周縁におかれた民衆がこの問題＝環境破壊のもっとも深刻な被害者であった。水俣病は、運動を通して、研究を通してその解明に取り組んできた人々の努力で、かなり広く知られるところとなった。しかし、理解の深まりとなるとどうか。あらためて、福祉国家が依って立つ現代社会に対する理解、現代という時代に対する認識が求められるであろう。20世紀の福祉国家は環境への考慮を、あるいは正しい認識を欠いていた。資源の浪費と自然の収奪の上に繁栄を追求した。20世紀の福祉国家が目指したのはそのような豊かさであった。しかし、それが真の豊かさであるかどうか。ことばをかえて、福祉国家の追求すべきところかどうか。水俣病は20世紀の福祉国家の限界を明示し、明日の福祉国家が進むべき方向を示唆している。

水俣病は、歴史的な現在に、すなわち生命感覚を麻痺させ、人類の生存に赤信号を点している現在に、世界を蔽うくアーバニズムに、環境の劣化を至極当然のこととして過ごしているわれわれに、警鐘を鳴らしているというのがわれわれの認識である。鈴木廣は、そうした歴史的現在を、次のように表現した。「環境の劣化が内在化して身体劣化を不可避なものとし、この傾向率に照応して精神の劣化たるイデオロギーが優勢となる。このように総括できるのが、21世紀へ踏み出そう

とする先進諸社会の生活様式を尖端的に集約しているアーバニズムの具体的内容である」(鈴木廣、1998: 348)。現代を見抜いた見事な表現である。水俣病とは、ほかならず、自然との共存という人間にとって根源的な存在形態を忘れ、自然の攪乱をあたかも<進歩>・<進化>と読み違えた人間の、そして、病の根源を直視せず、病を得た人々を<奇病>患者として差別的にすらみてきた、そうした人間的営為の帰結なのである。そのことへの認識を欠落させるとき、自然との共存という人間にとって根源的な存在形態を忘れ<進歩><進化>を考える考え方が一般化されるとき、緒方が言うように、「全てが<チッソ化し>、地球規模に拡大」する(緒方正人 2001: 9)。「半世紀前、水俣病事件の発生はこの海を侵すことから始まった。……言葉にすればたったの三文字の水俣病に、人は恐れおのき、逃げ隠れし、狂わされて引き裂かれ、底知れぬ深い人間苦を味わうことになった。そこには、加害者と被害者のみならず、<人間とその社会総体の本質があますところなく暴露された>と考えている。つまり<人間とは何か>という存在の根本、その意味を問いとして突きつけてきたのである。私自身、その問いに打ちのめされて85年に狂ったのである。それは、<責任主体としての人間が、チッソにも政治、行政、社会の何処にもいない>ということであった。そこにあったのは、システムとしてのチッソ、政治行政、社会にすぎなかった」(同上: 8)。「私は、この現代社会を象徴する縮図として水俣病事件をその中心軸に位置づけながらも、時代の本質を一生懸命に見据えようとしてきた。そこに見たものは、今や全ての命が値付けされた商品となり、市場経済に組み込まれたシステム社会であった。」(同上、9)。「生き物達の命の記憶を書き換え、改造し、生産性の効率のみが追及されている。私たちは今、<幾十億年に渡る遙かなる生命の記憶と

そのルーツさせ見失い、命の迷い子となって生命感覚を喪失しているのである。そのことが、現在続発している狂乱事件の根本原因であると考えられる。我々はこのシステム・ネット社会に同化している。その<養殖された命から天然の広大無辺のいのちへ>と目覚めなければならない」(同上: 10)。そして緒方はこうも言うのである。「私はこう思うんですね。私たちの生きている時代は、たとえばお金であったり、産業であったり、便利なものであったり、いわば<豊かさに駆り立てられた時代>であるわけですがけれども、私たち自身の日常的な生活が、すでにもう大きく複雑な仕組みの中であって、そこから抜けようとしてなかなか抜けられない。まさに水俣病を起した時代の価値観に支配されているような気がするわけです」。「この40年の暮らしの中で、私自身が車を買って求め、運転するようになり、家にはテレビがあり、冷蔵庫があり、そして仕事ではプラスチックの船に乗っているわけです。いわばチッソのような化学工場が作った材料で作られたモノが、家の中にも沢山あるわけです。水道のパイプに使われる塩化ビニールのは大半はチッソが作っていました。最近では液晶にしてそうですけれども、私たちはまさに今、チッソ的社会の中にいると思うのです。ですから私たちも<もう一人のチッソ>なのです」(同上: 49)。緒方も人間を不在化させる現代社会への危機を指摘する。現代のアーバニズムを生み支えているのは、緒方の言う<システム社会>、人間不在の<システム社会>である。

われわれも、鈴木広に学び、現代=歴史的現在の危機が<環境の劣化に連動する身体劣化>にあると認識する。そして、緒方に同意し<生命感覚の喪失>にあると認識する。われわれの福祉国家、21世紀における福祉国家=明日の福祉国家は、以上の二つの指摘(鈴木の指摘と緒方の指摘)がもつ重み自覚し、真剣に受け止めることが必要で

ある。この100年、われわれは、ハーワードの提唱した「都市と農村の結婚」=田園都市の構想を実現できずにきた。それどころか、産業化と都市化を急速に進行させ、自然を生産活動に従属させ、そうした延長線上に水俣病の発生を招来した。途上国においてこれまでにない経済成長が予想される21世紀は、地球規模で、公害と環境破壊が予想される世紀である。発展を伴わない成長、人間を抜きにした成長は、先進国・途上国の別を問わず、環境の破壊と健康被害を、成長の陰で抑圧され、コミュニティに沈没する民衆を、二重三重に抑圧の対象となる周縁的な民衆を創り出すであろう。水俣病は、「生命感覚を喪失」させている現代に警鐘を鳴らしている。あるいは、フロム流に言えば、正気を失った社会に対し警告を発している(From, E., 1955)。会社的な心性も、憎悪の相互性も、偏見と差別も、それらを克服するために不可欠な言語の放棄も、生命感覚の喪失を導く要因であり生命感覚の喪失の産物である。明日の福祉国家はそのことを意識して追求されることが必要である。くり返すなら、水俣病は決して「過去」の問題に属さない。

## 註

註1-1 そもそも社会は連続的存在であって連続性のない社会を想定することに無理がある。社会は、変動を経てなお、連続性と断絶性の両面を保持している。日本における戦前・戦後も、それを詳細に検討すれば、連続と断絶の両面がみられるのであって、連続と断絶を表面的にとらえて納得するほどわれわれの戦後は単純でないのである。一例を「民主化」に求めてみよう。川島武宣によって民主化の弊害として指摘された家族制度は今や誰の目にもその解体が明らかである。しかし、日本社会の民主化が進んだかと言えば楽観は許さない。社会の遺伝子はそうたやすく消滅しない。遺伝子

はわれわれの社会・国家の体内に、人々の意識に潜在し、思わぬところで頭を持ち上げる。とりわけ本論に関係する「風土」の問題は、連続と断絶を論ずる場合、念頭におかれてよいように思われる。

註2-1 司馬遼太郎の天草の貧しさを見る目は確かである。「佐渡、壱岐、対馬、淡路が島嶼であるのにそれぞれ一国として処遇されてきたのに、それらより大きい天草が一国をなしていないないといのは、ひどく片手落ちだった感じがする。が、右のように一島にして一国というくにくには、対馬国をのぞくほかはみな米作地なのである。律令時代から江戸時代にかけて土地の価格はどれほど米がとれるかにかかっていたということは、この『街道をゆく』を通じて触れつけてきたような気がする。(たとえば、旧藩以来島差別のはなはだしい薩摩においては種子島とその島人だけを本土なみにあつかった。種子島は豊かに米がとれるからである。また、一般に、江戸期の社会階層における差別も、米が基準だったようにおもわれる。たとえば畑百姓は水田百姓よりはるかに下におかれていた。)天草諸島は山ばかりでしかも水流がすくなく、水田面積というのがじつにすくない。農家といっても、古来、農業だけで成立していた家はまれで、零細な漁業を兼ねたり、他のしごとをしたりした。天草諸島は海流がめぐり、日ざしがつよく、いかにもめぐまれた土地のように思えるが、生産といえば水田農業という単純な条件下の社会では、まことにめぐまれなかった。」(司馬遼太郎『島原・天草の諸道』朝日文庫、2006年1月、163頁)。米が基準であった時代、米の生産に従事する農家と従事しない漁家の間に仕切りがあったとしてもおかしくない。なお、天草の貧しさについては、次のような指摘もある。『高浜村明細帳』によると、当時の高浜村の状態は百姓160軒に対し名子、無高水呑百姓らの下層民が102軒であったものが、それから30年下った寛政三年(1791)

には百姓122件にたいし、名子、無高水呑百姓が200軒となり、下層困窮者が全村の三分の二を占める累増ぶりをしめたことを記録しており、明和三年（1766）に江戸から長崎へ派遣された幕府の役人も、当時の天草の貧しさに驚きのあまりぼうぜんとしたことが『福連木村他国出稼人取調帳』にのこされている。海にかこまれている以上、生業を海にもとめればよさそうなるものであるが、天草はむかしから牛深をのぞいては良港にめぐまれず、漁業もはなはだふるわなかった。（「天草女」『日本残酷物語』第1部「貧しき人々のむれ」、平凡社343～344頁）。「宝暦11年（1761）の幕藩時代天草は決して豊かなところではなかった。端的に言って貧しい地域であった。そうした天草の実態を専門家は次のように捉えている。「天草では<島原の乱>後の処理が島原藩よりやや遅れて実施された。・・・天草の最初の公的検地は・・・「慶長肥後国絵図」で寺沢広高の提出によるものであり、その後二代堅高の内検による増石高を島原の乱後、天草は山崎家治の支配する処となるが、検地改訂は行われておらず、わずか三年で天草は幕府の天領となった時点で鈴木重成の支配下に入る。・・・鈴木重成、重辰親子二代にわたって、天草の石高改正を訴え、ようやく万治二（1659）年、島原の乱後二十一年目にして検地改正の許可を幕府から得られ、いわゆる天草の「石半減」が実現されることになったのである」（高木繁幸『島原藩の経済』ゆり書房、平成18年、186頁）。「・・・島原大変（寛政4、1792年）は天草にも大きな被害をもたらしたうえに田畑の年貢率は高率であった。「土地等級の細分化により、また検地見取りにより、村公称石高に対し年貢率が高く、特に畑年貢は異常に高率であったあと、加えて・・・雑穀年貢も徴収されていた。・・・そうした中で、天候不順で不作・凶作となればすぐ飢餓の状態に陥るのである。・・・島原の子守唄にみ

られるように、年貢が納められないため地主の家へ幼い子が子守奉公に出されたのはまだよい方で、家の借金の肩代わりに娘を売らなければならない家庭もあった。行く先は国内にも国外にも特に東南アジア方面には多かった」（同上、194頁）。天草の貧しさは天災・人災の帰結であった。天草の貧しさは戦後にまで続く。「大小百二十余の島嶼（とうしょ）からなる天草の生産構造は、半農半漁と出稼ぎである。しかし島嶼（とうしょ）の共通的条件として耕地面積はすこぶる少なく、田地は総面積の十九パーセントにすぎない。畑地の二十四パーセントを加えてもわずかに四十三パーセントである。したがって約半数にちかひ農家が三反未満の零細農家であり、五反未満層は全体の六十パーセントに達している。副業としての漁業は食うためのぎりぎりの手段であった。半農半漁の生産構造は生活の必然として生まれたが、この場合、漁業はあくまで補助的なものでしかない。漁獲方法も、無動力船による延縄、一本釣りなど、幼稚でsh法規模なものである。しかもかざられた湾内外の漁業はたちまちゆきづまり、生活の困窮はつるばかりである。地曳網、八田網などが沿岸漁業として発達したが、人口の増加はますます生活の貧困に拍車をかけた。その当時のうたに、チーン（珍しく）米食わん チーン米食わん ジョウジョウ（常々）カライモ（甘藷）に 鯛のシャー（お菜）米が食卓を飾ることはない。白い飯がぞんぶんに食える冠婚葬祭を、指折り数えて待ちわびたのは老人や子どもたちばかりではなかったのである。この貧窮の突破口を出稼ぎにもとめたのだ（「出稼ぎの島」、『日本残酷物語』現代編1、「引き裂かれた時代」平凡社、昭和35年11月、140頁）。

註2-2 しかし、ここで留意すべきは、水俣病の問題を企業・国家と水俣病の患者の間にだけ限定して考えないことであろう。谷川の言葉はそう示唆してい

る。憎悪の相互性は、水俣の住民相互のなかに、あるいはこの地域の住民相互の中にある。それは、突如、近代において明治国家において、明治の国家権力によって創られたものではない。近代以前の統治機構とささやかな民衆の生活防衛という権力（縦）と日常生活（横）の織り成す歴史の中で形成されてきたものである。明治の国家権力はそれを巧みに利用した。企業は、企業という内なる倫理をかざして「社員」と刻印した地域民をその他の住民と区別・管理し、そこに、利害の対立を意識させながら、その対立意識を「憎悪」にまで高めさせるような相互関係を創り出す社会的環境＝会社的な心性（飯嶋孝）を用意した。一方、「生産手段の所有と政治的立場から重層化される地域社会の中で、地域住民は、単なる階層の相違を超えた身分的格差の受容を強いられ、その不満・不条理を解決する手段・方法を保証されないまま、したがって、不満・不条理を潜在化させて、相互的に、反感を抱かせその反感を「憎悪」の感情として内面化させるという構図を創り上げてきた。くしかし、そのわずか数尺の川または路地一つで、言葉が違う。顔つきまで違うという人もいる」（岡本達明編1978年21～22）。そうした風土の深刻さは、われわれを含めて、外部者の理解の外にある。

註3-1 早瀬はこの著書の中で、ローマクラブの報告、『成長の限界』に詳しくふれている。『成長の限界』の意義を評価しながら、この報告の限界を、この報告をめぐる諸説に言及し、マンデルやマルクーゼの主張を検討しつつ、ローマクラブ派の近代経済学的イデオロギーを指摘し、転換に直面している世界資本主義の枠内での改良主義的欺瞞性を指摘する。（早瀬利雄『社会科学の諸問題』八千代出版、1983年4月、133～134頁）。そして次のように記述する。『『成長の限界』が、人口の爆発的增加に対する技術的文明の限界に関して世界的論

議の種をまき、経済の成長と人類の運命について深い関心をかきたてる効果があったにもかかわらず、社会的・政治的組織の成長や価値、慣習、文化などの人間的要因の検討を無視したところに重大な欠陥がある。このような経済社会学的認識の回避にこそ、独占資本主義の＜経済成長至上主義＞が何ゆえに＜人間の生存＞をおびやかすことになるのかという問題に（経済社会学的に）答えることが不可能な根本的理由がある。ブルユッセルのマルクス経済学者エルンスト・マンデル（Ernst Mendel）の『成長の限界』に対する批判もおおよそそうしたところにある」（同上、133～136頁）。

註3-2 ハイブルローナーは、脱工業化という言葉に懐疑をいだきながら、脱工業化という言葉に通常付与されている三つの異なった意味として、①農業からサービス業への労働移動、②知識の持つ役割の増大、③二極の階級関係の緊張緩和を挙げている。もちろんそうした動きは資本あるいは市場と一体になって進行するからヒューマンサービスや環境ビジネスを中心とする新しい欲望を創り出す市場の存在がある（Heilbroner, *R.L. Business Civilization in Decline, 1976*, W.W.Norton & Company, 宮川公男訳『企業文明の没落』日本経済新聞社、73頁、1978年3月）。

註3-3 権力が民衆の犠牲の上に維持されているという構図は近代に固有のものではない。権力＝中心の民衆＝周縁に対する抑圧は歴史を貫いて見られる現象である。

註3-4 水俣は水俣病から逃れることはできない。水俣の再生はくもやいなおしから始めなければならない。水俣の再生を考える市民の集いはいう。「水俣病患者の辛さや苦しさを、市民が知ること」、「少しでも患者の痛みを理解し、市民一人一人が持っている水俣病問題への複雑な想いを、本音でぶつけていく始まりとしたいと思いました。20年

も30年もいがみ合ったり、非難を続けてきた市民どうしが、そう簡単に明るく手を取り合って、語り合えるわけではありませんが、その入口にしようと思ったのが、この集いです」(環境創造みなまた実行委員会編『再生する水俣』、葦書房、1995年8月、79～80頁)。そして吉井市長も言う。「他の自治体が行っているような手法では水俣は再生できないと、やはり、他の都市がやっております手法の前にもうひとつ、水俣が解決すべき問題があるわけでありまして。それは、崩れてしまっております「内面的な社会の再構築だ」と。このことを成し遂げなければ水俣の発展はあり得ないと、そのように考えております。それは、私、常日頃から立場の違い、考え方の相違を各々が理解をし、そしてそのようなことを尊重し受け止めながら、かつそれを乗り越えてみんなで手を携えて、そして市の進むべき途を確かめていくということが大切だと。市政と市民、そして市民の都部であります患者団体との間に不信感が横たわり、そして反目があるって街は発展しないということでありまして。市政との信頼、市民との感情の亀裂を修復していく、一刻も早く修復していくということが非常に大切であると、そのように考えておるわけでございます」(吉井正澄水俣市長「内面的な社会の構築を」環境創造みなまた実行委員会編『再生する水俣』、葦書房、1995年8月、79～80頁)。確かに、20年も30年もいがみ合い、非難を続けてきた市民同士が、そして時に「白熱した憎悪」(谷川)なあって生きてきた地位の人々が、簡単に明るく手を取り合って語り合うことは難しい。しかし、「他の自治体が行っているような手法では水俣は再生できない、その前に、水俣が解決すべき問題がある、それは、崩れてしまった「内面的な社会の再構築だ」という認識と主張には水俣の再生を握る鍵にちがいない。しかし、それがどれほど重いものか、外部者の理解を超えるところ

もあろう。逆に、その重さを払いのけるために外部者の力が必要になる、そういうこともある。原田・谷川の対談に耳を傾けたい。「原田：＜水俣の町を再生＞という言葉は私達は簡単に使っていますが、水俣の町が果たして蘇るかどうか、蘇るとすればどうすればいいのか。もし蘇ることが非常に困難だとすれば、どうしたらよいのでしょうか。谷川：水俣に他所から来た人、しかも年齢は水俣問題と同時代に関係した人たちの世代である三十代、四十代の若い人たちにも期待を持ったほうがいいのではないのでしょうか。水俣病はあまりにも重すぎるテーマです。それをまともに考えたら押しつぶされます。・・・水俣の将来を考えると、水俣病だけで終わるわけには行かない。・・・その場合、若くて物怖じしない人たち、ある意味で楽観的、楽天的な考え方ないと出来ないのです。・・・鎮魂は大切ですが、それだけで終われば、それは終わってしまいます。しかし、水俣は鎮魂だけで終わらせられない使命もっています。そのためには若い人たちを組織しなくちゃいけません。・・・彼らのニーズならば、多少水俣病から逸脱してもかまわないからやる。無駄だと思ってもいいからやってみる。原田：それは無駄だとはおもわないですよ」(谷川：2006年、58～59)。水俣が将来どこに行くのか、行こうとしているのか。市民の意識を含めて記述されなければならない問題は多いけれどもそれは別稿の課題であろう。なお、水俣市民の意識調査には、丸山定巳・田口宏昭・田中雄次・慶田克彦編『水俣の経験と記憶一問いかける水俣病一』(熊本出版文化会館、2004年2月)、鈴木広編「都市＝環境パラダイムの構築と市民参加」(平成7・8年度科学研究費補助金研究成果報告書2001年3月、久留米大学文学部)などがある。

註3-5 ここでは一応念のため、庄司光・宮本憲一による公害の概念を記しておくことにしよう。「公害と

は都市化工業化にともなって大量の汚染物の発生や集積の不利益が予想される段階において、生産関係に規定されて、企業が利潤追求のために環境保全や費用を節約し、大量消費生活様式を普及し、国家（自治体をふくむ）が公害防止の政策をおこたり、環境保全の公費支出を十分におこなわぬ結果として生ずる自然および生活環境の侵害であって、それによって人の健康障害または生活困難が生ずる社会的災害である」（庄司光・宮本憲一『日本の公害』岩波書店、1975）

註3-6 初校を終えた後、東日本大震災が発生した。地震と津波による未曾有の大災害に加え原発による被害が事態を深刻なものとした。たしかに原発の被害は運転の事故によるものではない。むしろそれだけにわれわれのなかで科学の限界が十分意識されていたかどうか、あらためて、生活と科学について考える必要がある。

註3-7 佐藤仁の指摘するように、全体性の軽視は哲学に対する科学の優位という現象に通じている。その意味で、ここでは、専門家の解説に依拠して、ハイデッカーの主張にもふれておくことにしよう。ハイデッカーのいう〈存在〉は、実証科学を意識する。「実証科学は、存在するものの全体から、それぞれの対象領域を手に入れてくる。・・古代以来基礎学としてとおってきた哲学には、もはや探求可能ないかなる領域も残されていないように思われる。しかし、ギリシャ哲学はその決定的な始まりから、存在するものを問いの対象にしていたのではなかったか。そのとおりである。しかし、それはあれこれの存在するものを規定しようとしてではなく、存在するものを存在するものとして、つまりその存在に関して理解しようとしてであった」（木田元『ハイデッカー』岩波現代文庫、37～38頁）。「ハイデッカーは人間存在を、それが存在への問いにおいて問題になるかぎり、〈現存在〉とよぶ」（同上、45頁）。「だが、それにし

ても、この現存在の前存在論的な存在了解に問いかけて存在の意味を問いただそうとするばあい、その現存在は—もっと正確に言うなら現存在のその前存在論的な存在了解は—どのようなものであってもかまわないというわけではない。現存在や、当然その現存在において生起する存在了解には、多様なあり方がある。存在への存在論的な問いかけが根源的なものであり、それによって存在の根源的な意味が獲得されうるためには、問いかけられるべき現存在の存在了解も根源的なものでなければならない。もっとくだけて言うならば、現存在としての根源的な意味は得られないのである。ところで、ハイデッカーの考えでは、〈根源的〉とは〈本来的かつ全体的〉と言うことである。つまり、存在への問いは、本来性と全体性を獲得した現存在へ向けて問いかけられねばならないことになる。というよりはむしろ、存在の真の意味を問いただすためには、あらかじめ問いかけられるべきおのれの存在を本来的かつ全体的な存在へたちもどらせておかなければならないのである」（同上、45～47頁）。実証科学は哲学に勝利した印象もあるがハイデッカーは実証科学が部分的であり、未来的・全体的でない、即ち、存在の根源に対する了解に達していないと主張する。

#### 引用・参考文献

- 飯嶋孝「水俣病の〈心性〉草風館、『聞書水俣民衆史・付録5、草野風邪便り第38号』、1990年。
- 石牟礼道子編『水俣病闘争わが死民』現代評論社、1974年。
- 緒方正人『チツソは私であった』葦書房、2001年。
- 岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史—（1）明治の村』草風館、1990年。
- 岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史—（2）村に工場がきた』草風館、1989年。
- 岡本達明・松崎次夫編『聞書水俣民衆史—（3）村の崩

- 壊』草風館、1989年。
- 岡本達明編『近代民衆の記録—7漁民』新人物往来社、1978年。
- 上林貞次郎・北原道貫共著『日本産業機構研究』伊藤書店、昭和17年。
- 環境創造水俣実行委員会編『再生する水俣』葦書房、1995年。
- 小山弘健・上林貞次郎・北原道貫共著『日本産業機構研究』伊藤書店、1942年。
- 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想』岩波新書、1956年。
- 佐藤仁「現状の奥行きを考える学問」、川田順造・渡辺公三訳『C, レヴィ=ストロウス講義』平凡社、2005年。
- 鈴木廣編『災害都市の研究—島原市と普賢岳—』九州大学出版会、1998年。
- 谷川雁「無数の暗点、白熱した憎悪」草風館、『聞書水俣民衆史・付録2』、草野風邪便り第34号、1989年。
- 谷川健一『水俣再生への道—谷川健一講演録—』、熊本日日新聞社、2006年。
- 東京大学社会科学研究所編『福祉国家』全6巻、東京大学出版会、1985～95年。
- 中山茂「環境史の可能性」歴史と社会、創刊第1号、リプロポート、1982年。
- 西村肇・岡本達明『水俣病の科学』日本評論社、2001年。
- 早瀬利雄『社会科学の諸問題』八千代出版148～149頁、1983年。
- 広松渉（広松渉『生態史観と唯物史観』ユニテ、1986年。
- 丸山定巳「水俣病に対する責任—発生・拡大・救済責任の問題をめぐって—」丸山定巳・田口宏昭・田中雄次・慶田勝彦編『水俣の経験と記憶—問いかける水俣病—』熊本出版文化会館、2004年。
- 丸山真男『日本の思想』岩波書店、1961年。
- 水俣市市史編さん委員会『新水俣市史』水俣市、1991年。
- 水俣病に関する社会科学研究会『俣病の悲劇を繰り返さないために—水俣病の経験から学ぶもの—』国立水俣病総合研究センター、1999年。
- 宮村治雄『丸山真男日本の思想精読』岩波書店、2001年。
- 山田盛太郎「日本資本主義分析」1934年、岩波書店。
- R, L, Heilbroner, *The Worldly Philosophers*, 1953, ロバート・ハイルブローナー八木浦隆一郎・浮田聡・奥井智之・堀岡治男訳『入門経済思想史—世俗の思想家たち—』ちくま学術文庫、2004年。
- Heilbroner, *R.L. Business Civilization in Decline*, 1976, W.W.Norton & Company, ハイルブローナー宮川公男訳『企業文明の没落』日本経済新聞社、1978年。
- Stavenhagen, R., *Peasant Societies and Development*. 山崎・金田・青木訳『開発と農民社会』岩波現代叢書1981年 Howard, E., *To-morrow : A Peaceful Path to Real Reform*. 1898 長素連訳『明日の田園都市』鹿島出版会、1996年。
- Sombart, W. ゾンバルト「都市の居住—都市の概念—（鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房、1965年。
- From, E. *The Sane Society*, Rinehart & Company, Inc, 1955 加藤正明・佐藤隆夫訳『正気の社会』中央公論社、1974年。
- Gruhl, H. *Ein Planet Wird Geplunert*, ヘルベルト・グレーレル、辻村誠三・辻村透訳『収奪された地球』東京創元社、1984年。
- Andre Gorz and Michel Bosquet, *Ecologie et Politique*, 1975, *Ecologie et Liberte*, 1977, 高橋武智訳『エコロジスト宣言』技術と人間、1980年。

## 付記

小論の成立について記す。小論はアジアに関心を持

つ佐久間と水俣・天草に関心を持つ内藤が相互の関心から、一度、天草・水俣の問題とアジアの問題を統一的に扱ってみたいというところから出発した。近代に入り天草が「からゆきさん」を出してきたことは知られている。当初、佐久間の関心はそこにおかれた。その前に、「天草と水俣」という回り道をしておくことも意味のある試みではないかということになった。

われわれの試みはインターネットの所産である。共有する作業時間をもたないわれわれは相互に書いたものをネットに乗せ加筆修正をするという作業を繰り返して行った。執筆は、目次に記されたテーマに沿って、佐久間と内藤がそれぞれ素案（「問題の所在」「1. 近代日本における跋行性と民衆」「3. 水俣の教訓」を内藤が、「2. 近代日本と水俣」を佐久間が、「4. 結語に代えて：明日の福祉国家—結語に代えて—」を佐久間・内藤が担当し、相互に加筆修正を加えるという方式を採用した。なお、読者に不要な負担をかけないことを意識して文体は内藤が統一した。文責は内藤にある。

